第 60 回（一社）比較統合医療学会学術大会
第 20 回日本補完代替医療学会学術集会
一般講演 33

長期ステロイド治療を必要としなかった犬のステロイド反応性髄膜炎－動脈炎の２例

Two cases of steroid-responsive meningitis-arteritis in dogs that not require long-term steroid therapy

上田一徳 [1)]、川合智行 [1)]、安川明夫 [2)]
Kazunori UEDA[1)], Tomoyuki KAWAI[1)], Akio YASUKAWA[2)]
1）横浜山手犬猫医療センター　2）西荻動物病院
1）Yokohamayamate dog & cat medicalcenter　2）Nishiogi Veterinary Medical Hospital

【目的】

ステロイド反応性髄膜炎－動脈炎（Steroid-responsive meningitis - arteritis：SRMA）は、若齢犬が高熱と激しい頚部痛を主徴とする全身性炎症性疾患で、ステロイド剤の長期投与の実施が推奨されている。我々はSRMAと診断した若齢犬２頭に遭遇し、短期的な抗菌薬とステロイド剤の併用治療により良好な経過を得たのでその概要を報告する。

【症例 1】

ビーグル犬（未去勢雄、18ヶ月齢、体重は10.7 kg）が、突然の頚部痛、高熱、流涎を主訴に来院した。血液検査では、好中球の増多、CRP高値が確認された。CT、MRI、脳脊髄液検査からSRMAと診断し、ステロイド剤と抗菌薬の全身投与を２週間行ったところ症状は改善した。第783病日に再発し、抗菌薬のみを14日間投与して治癒。その後の再発は認められていない。また、再発時に血中サイトカイン値を測定したところ、免疫応答が低値であることが分かった。

【症例 2】

雑種犬（未去勢雄、17ヶ月齢、体重は7.1kg）が、突然の頚部痛と高熱を主訴に来院した。SRMAと仮診断し、ステロイド剤と抗菌薬の全身投与を１週間行ったところ症状は改善した。その後第107病日、第203病日に軽度の症状で再発。ともに３日間のステロイド剤と抗菌薬で改善した。第858病日に初発時と同症状を呈し、血液検査、CT、MRIよりSRMAと診断した。５日間の同処置後に症状は改善し、再発は認められない。

【考察】

本症例の治療経過により、SRMAには常在菌、感染細菌、あるいはその菌体毒素が関与し発症のトリガーとなりうる可能性があると考察している。サイトカインの測定結果から易感染犬であったと推測しており、抗菌薬の投与は推奨される。また、近年では早期にSRMAと診断出来ることからも、長期的なステロイドのみの治療に頼る必要性は無いと考えられる。